

ブルッフ／ヴァイオリン協奏曲第1番ト短調 Op.26

ブラームスより5歳年下で、昨年、没後100年を迎えたマックス・ブルッフは、ドイツとイギリスで活動した作曲家、指揮者である。生前はオラトリオを始めとする合唱音楽や歌劇、交響曲といった作品の評価が高かったが、今日演奏されるのは《スコットランド幻想曲》、《コル・ニドライ》、そして、この第1番のヴァイオリン協奏曲ぐらいだろうか。ブルッフはメンデルスゾーンを一つの目標としながら創作に取り組んだ。有名な第1番のヴァイオリン協奏曲もメンデルスゾーンの影響を感じさせる。たとえば、3つの楽章を休みなく演奏させる後者にならって、ブルッフも第2、第3楽章を続けているほか、ト短調・変ホ長調・ト長調という楽章ごとの調性の構成も、メンデルスゾーンのホ短調・ハ長調・ホ長調というパターンを移高したものである。その一方で、第3楽章で前の2つの楽章のモチーフを用いて一貫性をはかり、ソナタ形式をかなり自由に変形している点など、斬新な試みも含まれている。作品が初演されたのち、出版に至るまでの間に、ブラームスの友人であるヴァイオリン奏者ヨアヒムに相談しながら修正を試みたことから、十数年後に完成されたブラームスの協奏曲に間接的な影響を与えたともいわれている。「前奏曲」と題された第1楽章アレグロ・モデラートは自由なソナタ形式。木管で和声的な主題が奏でられる序奏ではじまり、主部では独奏ヴァイオリンが主題を提示。この2つの主題を使いながら、幻想曲風に構成されている。第2楽章アダージョは、独奏ヴァイオリンの甘美なメロディと、オーケストラによる低い音域を主体とした楽想の対話で進んでいく。第3楽章アレグロ・エネルジーコは、独奏ヴァイオリンの妙技を堪能できるフィナーレ。クライマックスの高揚は圧巻だ。第1楽章のリズム・モチーフや第2楽章冒頭のメロディによる第2主題が用いられ、全曲の統一がはかられている。

白石 美雪

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン ※スコア上の表記